

## 1

## 江戸幕府と日光の医療

本田 幹彦, 中西 公司, 本田 雅巳, 石川美知子  
緑川由紀夫, 原澤 寛, 中元 隆明

獨協医科大学日光医療センター

日光には世界遺産の文化遺産に登録された「日光の社寺」(東照宮, 二荒山神社, 輪王寺)があり, 江戸幕府の將軍社参時や日光山内での医療体制がどのようなものであったか興味を持たれる。今回, 東照宮稲葉久雄宮司のご協力を頂き, 参考資料から江戸時代の日光における医療事情を考察し報告する。

**將軍社参時の医療:** 將軍社参は徳川家康公の一周忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十一回忌など御神忌の年の例祭に合わせて行われていたようだが, 四代將軍以降はその回数が減り, 五十回忌以降の御神忌に將軍社参は行われなくなった。

江戸から日光へは片道最低三泊四日かかり, 社参全休の日程は九日から十数日にわたった。將軍には御三家をはじめ諸大名や將軍直属の家臣が供奉し, その中には当然医師の姿があった。『徳川実紀』には供奉した医師の名が載っている。享保十三年(1728)四月の第八代吉宗公の社参記事には, 「くすし四人, 外科二人, 針医二人, 眼科一人, 口科一人」と記されている。おそらく, ここに挙げられているのは將軍付きの医師であって, 各大名には大名付きの医師が供奉していた。

**日光山内での医療:** 東照宮の江戸時代の社務日誌である『社家御番所日記』に罹病の記事が記されている。第四代輪王寺宮である公寛法親王は正徳五年(1715)東照宮百回御神忌の年の一月に新門主として日光山に入り, 正月の務めを果たして二月に江戸に戻る予定であったが, 正月十九日に疱瘡に罹り, 療病院で療養した後二月十七日に帰還と記されている。療病院は日光東照社鎮座とともに山内に設けられた医療施設で, 初代の医者には家康公の側で鍼医奉公を務めた山名道与が任命された。医師は山内に常住して日光山門主の輪王寺宮に毎年屠蘇を献上し, 山内の奉仕者・役人・日光神領の住人の治療に当たることを務めとした。当初は世襲だと思われるが, 明和七年に療病院の医師が死去したため, 今市の町医者後藤邦司に療病院職が仰せ付けられた。また, 日光奉行には病状悪化のため辞任する例が多く見受けられた。これは冬季日光の厳寒の最中に早朝出勤を続けたことが負担になったものと考えられる。東照宮別大楽院住職の全海は, 天保十七年(1704)に腫物を患い, 宇都宮より医師や鍼医を招いて治療。翌年は足痛に悩み, 湯元から温泉を汲み取らせて入湯。遂には中禅寺湯(現在の湯元)に赴いて湯治を行った。大楽院住職を務めた遊城院も正徳二年(1712)より腰痛で歩行困難となり, 中禅寺湯(湯元)にて長期湯治を行っている。社家の罹病者も, 治療は中禅寺湯(湯元)や川俣湯に行き湯治が主であった。

以上から, 日光山内では療病院があったものの, 重い病を得た患者は温泉療法に頼る傾向があった。尚, 幕末にコレラが流行した折には, 神仏への祈りが中心となったようである。

**朝鮮人参栽培の発祥の地:** 日光では, 医薬品と見なされた朝鮮人参の栽培が広く行われていた。朝鮮人参を国内で栽培することを命じたのは八代將軍吉宗公である。各地で栽培を試みたところ, 日光の風土が適していることが分かり, 日光産人参の医薬としての効能も外来品に劣らないことが認められて, 盛んに栽培されるようになった。ただし, これは幕府の命によるものであって, 栽培された人参は幕府に買い取られていた。一時, 白田売買が認められたが, 幕府の庇護を離れた事で産業としては傾きかけたため, 再度幕府の買い取りを求めて立ち直った。第十代將軍家治公の享保の社参や第十二代家慶公の天保の社参の折には, 今市宿や七里の人参畑を將軍が上覧している。やがて, 幕府倒壊となると, 参作人の打撃は大きく, その後自らの手で人参畑を取壊し, 一挙にこの地方から人参畑が消え去った。